



アガサ・クリスティ 著
清水 俊二 訳
早川書房

そして誰もいなくなった

Ten Little Niggers(1939)



年齢、職業、経歴が全く異なる10人の男女のもとに、ある島への招待状が届いた。それぞれ微かな不信感を抱きつつも、その島（インディアン島）へ到着する。そこで彼らは、自分たちの意外な共通項を知らされる。過去に法では裁かれぬ殺人を犯しているということ！ 不安と混乱が渦巻く中、古い童話『10人のインディアン』になぞらえて次々と殺されていく招待客たち。脱出不可能な孤島にあって、全員が悟る。自分たちは殺されるために招待されたこと、そして10人の中に犯人がいることを！

著者のアガサ・クリスティは「ミステリの女王」と呼ばれ、その作品は世界で聖書、シェイクスピアの次に多く読まれていると言われる。幾多に存在する彼女の作品の中でも最高傑作と名高いのがこの『そして誰もいなくなった』である。冒頭に挙げたような極限の条件設定もあるが、やはり特筆すべきはその恐ろしく緻密な構成である。本作では10人全員の心理が代わる代わる描かれるのだが、これはすなわち犯人の心理さえ描かれるということの意味する。しかしクリスティは、巧みな表現を用いることで、犯人の心理を別の意味に解釈させたり、他の人間の心理と錯覚させた

りといった高度な叙述トリックを仕掛け、逆に犯人を推理することをより困難にしている。また陰惨な過去の回想も多く描かれ、物語はさらに混迷し、結果、前代未聞の結末につながるのである。本作はその驚きの結末あつてのものなので、これ以上語ることは避ける。ただその結末はミステリの女王として堂々たるものであり、古典的でありながらも衝撃的であることは間違いない。さらに、こうした叙述トリックがふんだんに用いられている作品は、二読目に著者の意図や仕掛けに気をつけて読んでみるといった別の楽しみ方も味わうことができる。

また、クリスティの書き方の特徴として、多用される会話文、簡潔な文章、専門知識を必要としないストーリーなどが挙げられる。そういった作風が、彼女の作品を万人に受け入れられやすいものにしており、そこも本作を薦める一因である。もちろん読者をミスリードする上でも、そういった特徴が重要な意味を持つことは言うまでもない。

推理小説に興味がない人は、こういった不朽の名作でも手を出しにくいと感じるかもしれない。しかし、この機会にぜひ一度読んでいただきたい。第一級の面白さを味わえるはずだ。 (マノ)



食べ物が傷みやすい夏に向けて、保存食の鳥ハムを紹介します。そのまま食べてもよし、他の料理に添えるのもよしの万能料理です。 (kaeru)

材料 (2人分)

鶏ムネ肉	500g
砂糖	大さじ 1 杯
塩	大さじ 1.5 杯
コショウ	少々

1人分を作るときは、全分量を半分にしてください。

- ①鶏肉表面に砂糖と塩をまんべんなくすりこみ、コショウをまぶす。それを袋に詰めて、冷蔵庫で一晩寝かす。
- ②鍋に鶏肉がつかぐらいの水を入れて沸かし、一晩寝かせた鶏肉を入れて20分ほど煮込む。
- ③火を止めてそのまま6時間ほど冷ました後、鍋から取り出し、適当な大きさに切れば鳥ハムのできあがり！

はみだし
すてーじ

えんぴつで書いてみました。味があるでしょ？
⇒その味がこの紙面上で伝わるかどうか、気がかりです。

(工・院 るな☆さん)
(できれば鳥ハムの味も伝えたい；編)